

13世紀戦乱期の知識人：金圪のモンゴル認識

尹, 龍赫
公州大学：教授

<https://doi.org/10.15017/2186171>

出版情報：韓国研究センター年報. 12, pp.1-7, 2012-03-28. Research Center for Korean Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

13世紀戦乱期の知識人——金坵のモンゴル認識

尹龍赫 (公州大学校教授)

はじめに

1. 金坵の対蒙外交活動
2. 金坵の対蒙認識
3. 対蒙抗戦についての評価
4. 元宗朝——金坵の現実認識

おわりに

はじめに

金坵(1211-1278)は、李奎報(1168-1241)、崔滋(1188-1260)の後に続いて、13世紀高麗時代の文才であり、有名な3大人物の中の一人である。しかし、李奎報と崔滋に比べて金坵は相対的にあまり知られておらず、研究も貧弱なのが実情である¹⁾。

金坵はモンゴルとの戦争が進んだ時期に官途についた後、高麗がモンゴルに服属する元宗朝に文才で名を馳せた。彼についての検討は、戦乱期の対蒙認識、そして抵抗から服属に移行する元宗朝対蒙関係の転換期を理解するのに役立つ。彼についての論文がいくつか発表され、出身背景、政治や学問等に対する全般的な理解がある程度は進展し、その過程で金坵のモンゴルに対する認識が論議されもした。しかし、その論議は一般的な水準に留まるか、同意し難い観点から展開されたりもしてきた。

そこで、本稿は、既存の研究成果を参考にしながら、とくに金坵が持っていたモンゴルに対する認識についてもう少し明確に論点を整理したい。

1. 金坵の対蒙外交活動

金坵は高宗14年(1227)に17才で成均試に合格し、5年後の高宗19年(1232)に22才で禮部試に及第した。高宗23年(1236)には濟州の判官を経て、高宗27年(1240)に權直翰林の職に就いていた彼は使臣団の一員としてモンゴルに派遣された。8年間の翰林院生活の後、樞密院の堂後と閣門祇候を経て、高宗34年(1247)に金坵は国学直講に抜擢されたが、執政者である崔沆の推進する円覚經の刊行に対して誹謗する詩を書いて左遷されるなど、政治的に苦勞した。そして10年後(高宗44年、1257)に崔沆が死んでからやっと彼は翰林院の知制誥に復職することができた。

この後の官途は比較的順調であった。右諫議大夫(元宗4年)に大司成と尚書左僕射(元宗10年)、樞密院副使、政堂文学(元宗11年)、吏部尚書(元宗12年)、参知政事(元宗14年)、中書侍郎平章事(元宗15年)などの官歴がこれを表わしている。忠烈王4年(1278)に世を去る時まで約20年間、彼は高麗の官人社会で一定の政治的影響

1) 金坵についての論文は、柳浩錫「止浦 金坵論」『全羅文化研究』7, 1993; 하태규「고려후기 김구의 정치활동과 학문」『역사와 현실』32, 1999; 이남복「金坵의 반몽활동과 仕宦 생활」『大邱史学』78, 2005がある。

力を維持した。

金坵の対蒙外交活動は、高宗27年（1240）にモンゴルに使臣として行ってきたことと、主に元宗朝においてモンゴル朝廷に送った主要外交文書作成をほとんど全担したことであった。年譜には麗蒙戦争期に金坵が高麗使臣としてモンゴルに派遣されたことが、この1回に限って見られる。権直翰林の金坵がモンゴルに派遣されたのは高宗27年（1240）の第3次侵入が終わった直後のことであった。この年には4月と12月の2回に渡ってモンゴルへ使臣を派遣したが、4月には右諫議の趙修、閤門祇候の金成寶などが、12月には禮賓少卿の宋彦琦、御使の權躋などであった。金坵が4月と12月のどちらに便乗したのかについては明らかではない。しかし、『止浦集』の「過西京（西京を経ながら）」の中にある「可憐城關空青草（憐れなことに城關には青草だけが空しくある）」、「麻麥遍生朝市道（官衙と市場の道には麻麥が遍く茂っている）」という句節によって高宗27年（1240）の4月に右諫議の趙修、閤門祇候の金成寶など同行したことがわかる。「青草」、「麻麥遍生」という季節は陰暦の12月ではなく4月に該当するからである。4月の出発であったとしたら彼はその年（1240）の年末頃にモンゴルから帰ったことであろう。

モンゴルについて外交文書を作成したのは、現存している史料によれば高宗46年（1259）から忠烈王4年（1278）で、主に元宗朝のときであった。これは彼の対蒙外交活動の核心を占めている。元宗朝の高麗は公式的にはモンゴルに対して屈伏した状態だったが、これはどこまでも表面的なものに他ならなかった。崔氏政権の崩壊にもかかわらず一時続いていた武人政権は相変わらず国王をその管理下に置いて、江華島を固守する政策を維持しようとしたからである²⁾。侍中の李藏用をはじめとする柳璣や金坵などの主として高宗代の科挙出身の官僚達であるが、彼らは高麗の社稷保衛がモンゴルとの終戦及び講和によって可能であると認識した。反面、武人政権は相変わらず抗戦による社稷の保衛を名分としていたので、武人政権が崩壊する元宗11年（1270）までの10年あまりは、表面的な屈伏にもかかわらず内面的にはいまだに抗戦の基調を維持する二重的な立場を見せている。

表裏が同じでないこのような政治状況においては、それだけに外交文書の作成は殊更に特別な文章力と政治的感覚が要求されもした。高麗のモンゴルに対する二重性の矛盾は金坵の文章で埋めて行くのが元宗朝の状況であったのである。『止浦集』には『東文選』から選り分けて集めた合計53件のモンゴルとの外交文書が収録されている。主に元宗年間に金坵が作成した外交文書なのだが、モンゴルに送った外交文書の作成時点は高宗46年（1259）から忠烈王4年（1278）の約20年にわたっている。これによって1278年に世を去るまでの20年間、微妙な高麗の対蒙外交の文書作成を彼がほとんど全部を担当していたことがわかる。

53件の外交文書は、内容別には賀表、起居表（謝恩表、告奏表）などの比較的儀礼上の人事関係文書が37件で多くの比重を占めており、特定事案について高麗側の事情を陳述してモンゴル側の了解を要求する陳情表が6件、そして貢物などの物品を伝達する方物表（進封表、物状）などが10件を占める。公式的にはその前半にもモンゴルに対して服属する立場を執っていたので外交文書の性格に前後大きな差はないが、陳情表が前半に4件、後半に2件で、前半で外交的葛藤や懸案が多かったことを示している。

これらの文書は全部、高麗の屈伏後の元宗代のもので、徹底的な事大外交文書として一貫している。さらに、その大部分は『東文選』に収録された資料を利用したものである³⁾。金坵の外交文書は比較的豊富な量があるが、外交文書の性格上この資料を通して個人の対外認識を把握するのは難しい。外交文書は、どこまでも国家間の利害に立脚した「外交的」文書だからである。

この様な限界点があったとしても、残された外交文書を通して見ると、金坵は国益と実利という徹底した現実

2) 윤용혁 「원종조의 대몽관계 -왕권과 무인정권의 갈등을 중심으로」 『고려 삼별초의 대몽항쟁』 일지사, 2000.

3) 하태규 「고려 후기 김구의 정치활동과 학문」 『역사와 현실』 32, 1999) によれば 『東文選』 には總72首に至る金坵の文が載っている。

主義的な立場で問題に接近しているように見える。しかし、すでに柳浩錫が指摘したように、彼の「内心の深いところまで元を受け入れたわけではなかった」のである⁴⁾。モンゴルに対する彼の真の認識は江都時代高宗朝の彼の作品を通して見えてくる。

2. 金圻の対蒙認識

金圻が作成した元宗朝の対蒙外交文書は、あくまでも当時の高麗とモンゴルの関係に立脚してその利害を反影したものであるから、これを通して金圻のモンゴルについての認識を把握するのは難しい。しかし、多くはないが残された短い詩節や何編かの詩文は金圻の対外関係、特にモンゴルについての認識を把握できる資料となっている。

高宗27年(1240)、モンゴルの第3次侵攻が終わった直後、30才の若い官人の時に彼が使行団の一員としてモンゴルに入るとき、遷都と戦争中という状況のなかで彼は非常に感慨をもっていたようである。高宗22年(1235)から数年間、再開したモンゴルの侵入によってすでに高麗は沢山の被害を受けていた。彼はモンゴルの相次ぐ侵入で修羅場となった高麗の立場について深く心を痛めていた。彼のこの様な心情は高宗27年(1240)の書状官としてモンゴルに入るときに詩を通して垣間見ることができる。モンゴルの地境に入りながら、彼は「出塞(国境を越えながら)」という詩を詠んだ。

峽中盡日踏黃沙	深い山中で一日中黄砂を踏み
横擁氈裘冒雨過	ボロの衣を斜めにかけて雨の中を過ぎて行く
山盡已疑胡地盡	山が尽きて早くも胡地が終わったかと疑わしく
地多還恐朔天多	土地が広いから殊更に北方の空が広いのかと恐れを感じる

(『止浦集』1, 「出塞」)

ここで金圻がモンゴルの支配下にある地域を「胡地」と詠んでいる点が注目される。モンゴルを「オランケ(胡)」と指称しているのである。他方、執政者崔瑀に献上した詩の中にも「辺方の月の下に『オランケ(胡)』の影が消えてしまつて」とある⁵⁾。おそらくモンゴルの第3次侵入以後の状況と考えられるが、その中でモンゴルについての呼び方はやはり「オランケ(胡)」としていたのである。同じ時期に書かれた「過西京」という詩では、モンゴルの侵略で荒廃化した西京(平壤)の様子に非常に心を痛めた金圻の心境が描写されている。“高句麗の継承”という高麗の正体性が具現されたものが即ち西京であったため、西京の荒廃した様子から金圻はまさに高麗の正体性の危機を実感したのである。

モンゴルに行ってきた後で、彼は紀行文として『北征録』という書籍を残した⁶⁾。この書籍は現在は伝わってはいないが、『北行録』ではなく『北征録』というその名前には特別な意味が含まれているように思われる。モンゴルに行ってきたことを「行」ではなく「征」と表現しているからだ。これは当時の彼のモンゴルに対する認識を反映するものでもある。『北征録』が後代に伝えられていない理由も多分内容の「不穏性」にあり、元の干渉期を経るなかで隠されてしまったからだと思われる。

金圻が執政者である崔沆を軽蔑して円覚經の跋文作成を拒否し、「嘲円覚經」という詩を書いたことは前にも言

4) 柳浩錫「止浦 金圻論」『全羅文化研究』7, 1993, p.82.

5) 『止浦集』1, 「上晋陽公詩」

6) 『高麗史』106, 金圻傳.

及した。個人的に彼は執政者の崔沆に不満を抱いていたのだが、この筆禍事件で崔沆が「私に口を閉ざしているというのか」と怒って、彼を濟州判官として左遷させたということである⁷⁾。以後、崔氏政権下で金坵は完全に排除されてしまった。彼が自分の文才を発揮して対蒙外交文書を作成して自分なりの政治的立地をもてるようになるのは崔氏政権の崩壊後のこととなった。

金坵の円覚經の詩は崔沆を嘲弄したにはしたが、だからといって釈迦と仏經の価値を軽く見たものだともいえない。ある点から見てみればこれを至極重要に評価したために返って「嘲圓覺經」のような詩を書いたのだといえる。藏經の彫造がもつ護国的な意味を金坵は深く同感して支持していたからである。宮廷の宣政殿で大藏經の法会を挙行する道場について彼は次の様に詩を作り、讚嘆したことがあった。

一會藏嚴是鷲峯	莊嚴なこの法会が正に靈鷲峰である
百爐香動瑞烟濃	火爐ごとに香が上がりめでたい煙が立ち込めている
講唇走玉翻三藏	講ずる唇は玉が転がるように三藏をみな解き
譚舌飛珠演五宗	物語る舌は珠を飛ばす様に五宗をみな演説する
端信覺皇分着力	ひとえに仏力を信じるなら
定教兵騎不留蹤	絶対にあの騎兵達をこの地に留めおきはしない

(『止浦集』1, 「宣政殿行大藏經道場音讚詩」)

彼が考える大藏經板刻の意味は格別なものであった。大藏經はモンゴルから防ぎぬくことのできる本当に意味のある事業であった。

一藏全勝百萬師	一つの藏經がひとえに百万の軍師よりも勝り
故應魔外不容窺	当然天魔外道ですら敵わないであろう
揀來龍象渾無畏	龍象を選んで来るのに少しも恐ろしいことはない
掃去豺狼更莫疑	豺狼くらいを掃蕩するのにまた何を疑うことがあろうか
晝講杵頭眷玉屑	昼間の講説は杵の頭で玉の粉について
夜談椽腹吐金絲	夜の經談は椽の腹から金糸を吐く

(『止浦集』1, 「宣政殿行大藏經道場音讚詩」)

これは「藏經一つが百万の軍師より」勝るという大藏經がもつ護国的意味、仏教文化がもつ力を指摘するものであるといえる。この詩では何よりも彼はモンゴル侵略軍を「豺狼」と指称した。勝手に高麗の地境を踏み荒らし、人命を殺傷して制御できないほどモンゴル軍は彼にとって「山犬や狼」に他ならなかったのである。

3. 対蒙抗戦についての評価

高宗27年(1240)4月、使行の一員としてモンゴルに行ってきたとき、金坵は国境を越える前に国境地方の鉄州を経由することになった。鉄州はモンゴル侵入初期に悲壮な戦闘があった現場として、これについての感想を記録した詩が残されている。モンゴルとのこの戦闘についての彼の感想は金坵が抱いていたモンゴルに対する認

7) 『止浦集』1, 「嘲圓覺經」.

識の一端といえる。

モンゴル軍による鉄州城の殺戮は開戦初期の高宗18年8月29日（壬午）に、「モンゴル元首のサリタイが咸新鎮（義州）を包圍し、鉄州を殺戮した⁸⁾」と記録されている。この戦闘は8月中旬から始まり、約半月続いたのであった。当時モンゴル軍は鴨綠江を渡江した後、咸新鎮を通過して2隊に分かれたが、モンゴルの部隊は鴨綠江河口から西海沿岸に沿って南下した。

鉄州を包圍したモンゴル軍はまず鉄州城の降伏を促した。咸新鎮（義州）で既に降伏した趙叔昌がここに利用された。この時、瑞昌縣で敵の捕虜となった文大もこの鉄州城懐柔作戦に動員されたが、彼は鉄州民たちにむしる「偽のモンゴルであるから降伏するな」と叫んでモンゴル軍に殺された⁹⁾。これに力を受けて鉄州の防御を担当した李元禎はモンゴル軍の懐柔に応ぜず、命懸けの防禦戦を決意した。鉄州の陥落が遅れたのは李元禎によって指揮された鉄州民の強力な抵抗のためであった¹⁰⁾。当時の戦闘については『高麗史』に次の様な記録が残っている。

モンゴル軍が城の攻撃を非常に急ぎ、城中では食糧が尽きて守ることができず陥落一步手前であった。判官の李希績は、城内の婦女や幼い子供たちを集めて倉庫に入れて火を付け、自らも壮年の者たちとともに自決した。（『高麗史』121, 文大伝）

金圻は鉄州城を通りながら当時の戦闘について詳細な話に触れ、当時防禦戦を指揮していた鉄州防禦使の李元禎と判官李希績の決死的抗戦に深い感動を受けたようである。モンゴル軍の侵入、そして引き続いて鉄州城戦闘について金圻の詩で次の様に描写されている。

當年怒寇闌塞門	當年に怒った外寇が国境の城門に乱入し
四十餘城如燎原	北界の40余りの城は火の燃えひろがった野原のようであり
依山孤堞當虜蹊	山に頼った寂しい城の胸壁が敵の近道を遮り
萬軍鼓吻期一吞	万軍が口を開けて一気に吞もうとする

（『止浦集』1, 過鐵州）

北界のいろいろな地域が次々と陥落する危機的状況の中で戦闘が続けられたことを金圻は描写した。当時、鉄州城がモンゴル軍の尖鋭した攻撃にもかかわらず容易く屈服せず、戦闘が続けられたのは城内の指揮官と兵士、そして住民たちの団結した共感があったからである。

戦闘は熾烈の極みであった。一体このような戦闘を当時の高麗として行ってみた経験もあまりなかった。どうしたら「白骨で火を燃やして飯を炊いた」と描写されるほどであったといえるのだろうか。それにもかかわらず鉄州の官民は容易く倒れはしなかった。鉄州の官民たちは城が結局守り切れないとわかったが、敵に投降するのを最後まで拒否した。そのため、その戦闘はいっそう悲感的なものとなった。

相持半月折骸炊 互いに半月も持ち堪え、白骨を薪にして飯を炊いて

8) 『高麗史』23, 高宗世家 18年8月.

9) 『高麗史』121, 文大傳.

10) 윤용혁 『高麗 對蒙抗爭史 研究』一志社, 1991, pp.41-45.

晝戦夜守龍虎疲	昼間は戦い、晩に守るのに、龍と虎が疲れ
勢窮力屈猶示閑	形勢を尽くして力を屈しても、むしろ余裕を見せようとする
樓上管絃聲更悲	樓の上の管絃の音が殊更に悲しいことよ

（『止浦集』1, 過鐵州）

鉄州防禦使の李元禎はついに名誉を失わずして戦闘を終わらせることを決断した。まだ軍糧や軍需品が残っている倉庫をすべて燃やした。これは敵に物資を残しておかないことが、他の城を守るのに少しでも助けになるからであった。彼はその燃えさかる火の中に妻子とともに身を投げ花と散った。鉄州戦闘において何よりも青年官人の金坵の心の底を揺さぶったのは李元禎の献身的な最後であった。彼は鉄州官民の崇高な偉業に加えて、同じ高麗の官人として李元禎と李希績の名を後代に残したかったのである。

4. 元宗朝 — 金坵の現実認識

しかし、長年の戦乱にもかかわらずモンゴルに対する抵抗は成功しなかった。百姓たちを考えればモンゴルに対する対策がなく、無限の抵抗が最善の方策でしかなかった。そのような背景において高宗46年（1259）太子の入朝が成し遂げられ、間もなく即位した元宗代がモンゴルとの軍事的に対決する代わりに外交的な掛け引きをすることで局面の転換がなされることになった。この期間中に金坵によって作成された多くの対モンゴル文書は徹底したモンゴル皇帝の“加護”について感謝の意を表現している。しかし、それが心からの表現というよりは、国際関係の現実的な難局を打開しようとする刻苦涙ぐましい措置であったことはいうまでもない。この時期、金坵の心境を表わした作品はほとんどないが、国王元宗を高める次の詩は稀にこの時期の個人的な作品として注目される。

我王曾爲活蒼生	我が王におかれましては早くから民を生かすために
親屈龍沙萬里行	砂漠の地に御身を屈しながら万里の歩みをされた
北極風雲初啓會	北極の風雲が初めて会合し
東方日月更廻明	東方の日と月が再び明るんで来る
笙歌滿國呈新喜	笙の音が国中に満ち、新しい喜びを捧げた
劍佩趨朝賀太平	分散した佩劍たちも朝廷に駆け付け太平を祝う
請見功臣歸美處	見よ、功臣たちの頌徳するところを
山舍萬壽湧崢嶸	青山も万寿が湧きいで高くそびえることよ

（『止浦集』1, 「迎主教坊致語詩」）

元宗即位の初期の作品と見られるこの詩は、元宗が高宗46年（1259）に太子として入朝したことに対して、民を生かすために「御身を屈しながら万里の歩みをされた」と表現している。モンゴルへの服属は、王がモンゴルに「御身を屈する」ことであったが、社稷と民のために仕方のない選択だったのである。それは現実的な条件の下で不可避になされた対モンゴル関係の転換を緩曲に表現したものだといえる。

金坵は元宗朝モンゴルに対する事大的論調の外交文書の作成をほぼ全部担うことで、抵抗から服属に転換する対モンゴル関係の新たな定着に核心的な役割を担った。このような彼の活動は、モンゴルとの関係を転換せねばならない、変化した現実の与件を受け入れたものなのである。金坵のモンゴルに対する認識は変化したが、その

始点が1240年に彼が使節団の一員としてモンゴルに行ってきた後であるとか、あるいは金坵が1237年から1240年に渡って八万大蔵経の刻成に参加してから後にこれ以上これに参加していないことをモンゴルに対する認識変化と関連させて理解しようとする見解¹¹⁾については同意し難い。1240年が認識変化の始点ならば、前に引用した反蒙的意識を表出した1240年の詩を書くことはできなかったのであり、また、八万大蔵経刻成への参加者名も金坵ではなく金綵もしくは金求であるからである。

おわりに

高宗46年（1259）以後の局面転換で、高麗はモンゴルに服属する立場となりはしたが、だからといってモンゴルに対する認識がまさに正反対に転換したと見るのは難しい。変化した状況のために彼は自分の考えを隠して、モンゴルとの新しい関係を構築する重要な業務を随行する現実に自身を適応させていったのである。反蒙から附蒙に変わっていくこの時代、高麗の知識人が経験した二重のくびきの事例だともいえる。微妙な対蒙外交文書の作成もやはり国益のための仕事であるという彼なりの確信によるものであったということである。

11) 이남복 「金坵의 반몽활동과 仕宦 생활」 『大邱史学』 78, 2005.